飯島武次先生のご退職にあたって

中野　達哉

飯島武次先生は、二〇一四（平成二六）年三月をもちまして定年を迎えられ、駒澤大学を退職されることになりました。三四年間の長きにわたり教鞭を執られて教育・研究に打ち込まれ、歴史学科にも大きな足跡を残されたことにつきまして、心より感謝申し上げます。

飯島先生は東京都世田谷区にお生まれになり、東京都立駒場高校から、一九六二（昭和三七）年駒澤大学地理歴史学科へ進まれ、考古学の道を歩み始められました。大学四年生の時、駒澤大学で非常勤講師として授業を持たれていた倉田芳郎先生のもとで、考古学研究会を立ち上げましたが、その研究会は現在も活発に活動を続いています。一九六七（昭和四二）年には東京大学大学院考古学専攻へと進学され、「東周の副葬陶器をめぐる諸問題」で修士論文を提出され、さらに博士課程へ進まれ、関野雄先生に師事され、本格的に中国考古学研究の道を歩まれることになりました。

一九七二（昭和四七）年、東京大学の助手となり、北海道常呂にある実習施設に赴任して、藤本強氏らと岐阜第三遺跡やライトコロ川口遺跡などを発掘されました。常呂にいる間にスキーの腕前を上げられたようで、現在も趣味の一つになっているようです。その後、一九七六（昭和五一）年、財団法人古代学協会研究員・平安博物館専任講師となり、京都市内の発掘に従事されました。

一九八〇（昭和五五）年、駒澤大学文学部専任講師として赴任されました。それまでは、考古学の教員が倉田芳郎先生お一人でしたが、お二人で歴史学科において考古学の教育・研究を進めていくことになりました。一九八二年（昭和五七）には助教授、一九八八（昭和六三）年に昇任され、教鞭を執ってこられましたが、学科主任、大学院専攻主任、第二人文科学研究科委員長を歴任され、教育の面で大きな役割を果たされました。

飯島先生のご専門は中国夏王朝から西周王朝時代のご研究ですが、一九八七年、「夏殷文化の考古学研究」で東京大学から文学博士を授与され、同じ書名で出版されました。その後、『中国新石器文化研究』『中国周文化考古学研究』『中国考古学概論』『中国夏王朝考古学研究』の単著をはじめ、多くの編著書や論文等を執筆され、中国考古学研究に大きな成果をもたらしました。また、学会におきましては、日本中国考古学会の副会長・会長、日本考古学協会では国際交流委員会会長を務められ、日本の中国考古学会を牽引されてこられました。

飯島先生が中国へ最初に訪れたのは、日中国交正常化して間もない一九七六年でしたが、その後一九八五年に北京大学の鄒衡氏のもとを訪れ、西安で発掘していた徐天進氏を紹介され、二人で貨物列車に乗り込み周原を目指したそうです。まだ未解放地も多く、結局、周原には外国人として入ることができず、宝鶏などをまわられたそうです。その徐天進氏とはお互い信頼しあう関係となり、今日に至っています。飯島先生は訪中を重ね、中国での発掘や調査を続け、一九八六年度、二〇〇九年度に中国留学をされて多くの中国研究者と交流を続けられて来ました。二〇一三年一二月一四・一五日に開催された日本中国考古学会は、飯島先生の退職に合わせて駒澤大学で開かれましたが、そこへ社会科学院所長の王巍氏、許宏氏、北京大学の徐天進氏や趙輝氏、焦南峰氏らがお越しになりましたことは、いかに中国の研究者に信頼があるかを物語ることだと思います。

飯島先生は、二〇〇一年、中国での発掘実習を陝西考古学研究所の焦南峰氏と始め、その後北京大学、徐天進氏と進めてこられました。日本において、正規の授業として外国での発掘実習を行う大学は、他にはみられません。そして、その発掘には実習生のほか、大学内外の大学院生も参加するなど、駒澤大学考古学専攻の特色の一つとなっております。このようなことができるのは、飯島先生が長年中国において多くの研究者と交流を持ち、先生の学問や研究者との信頼で作り上げた太いパイプによるものだと思います。

飯島先生が本年度をもって退職されることは誠に残念ですが、研究はこれからも続けられるということをおうかがいしております。今後もご健勝でご研究を続けられ、駒澤大学、歴史学科を見守っていただきたいと存じます。